

は、大に耻る處である。

書棚に隣りて三尺の出入口、それに隣りて押入、こゝには、額縁やら繪具をら雑多なものが押込んである。

四方の壁の裾には、大小の額縁が立かけてある。それは何れも展覽會から返つて來た私の水繪で、年々歳々、古い縁のみ漸く溜りゆくのは閉口する。

畫室は今から十年前に建てられたもの。その年の秋には、三宅氏が私の家で新に夫人を迎えられて、一時此室が新婚者の居間になつた事もある。三十五年には外遊を共にせし石川寅治氏が一月程住居はれた。丸山氏も郷里に在りし頃、時々出京して私の家に泊らるゝ時は、いつも此畫室を氏の寢室に宛てた、それは、氏は有名の早起であるから、靜かな處をとの家人の心遣ひからであつた。

私の家の新年會は、いつも此畫室で開く例になつてゐる。其時は床の上に在るものは皆、他へ搬出して仕舞ふ、この狭い部屋へ二十餘人のお客であるから随分窮屈だが、それがまた親密の度を一層深くさせるやうである。

毎土曜日には、此室で授業をする。また訪れてくれた人にも逢ふ。稽古に來る人は、事情あつて研究所へゆく事の出來ぬ人達である。松戸から來る竹内嬢最も古く、鈴木翁は、七十五歳の高齢でありながら、毎週缺かざずに來て勉強されてゐる。

私の家に在る時は、大概此畫室に居る。繪の製作もする。『みづゑ』の原稿もこゝで書く。書物も多くこゝで讀む。

食後または豫定の仕事の濟んだ後、室の眞中に長椅子を出し、それに緩やかに凭りかゝつて、好める書物を讀む時、これが、私の畫室に居ける一番楽しい時であつて、人から頼まれた、自分に不得意な繪を描いて、旨くゆかず、繪具皿をこれ廻して嗟嘆する時、これが一番私にとりて苦しい時である。

(四十二年四月一日記)

ピラミッドは如何して建てたか

ピラミッドを建てる時あの巨石を如何して運んだかと云ふことは誰にも分らない。いくら大勢の人足を使用した處で何か機械力を借らない譯には行くまいが。一説には石を一階積上げると其の周圍に砂の土手を造り傾斜を緩にして其上を石を轉がして押上げる。それで次の一階が積上がれば又砂の土手を造つて行くからピラミッドが出來上つた時には全く砂の中に埋まつて居る。それから今度は又其砂を取退けると云ふ順序であるが。そうかとも思ふのは。チオプスの大ピラミッドを造るに十萬人の人足を三十ケ年も使用し併も石を切出した場處は僅十町内外の處であつたと云ふのを聞いて合點がゆくのである。(欽、譯)

*

*

*

*

*

*

*

*